

中

岡部達味

Tatsumi Okabe

MODERNIZING THE
MIDDLE KINGDOM

中国近代化
の政治経済学

改革と開放の行方を読む

THE PATH OF REFORM IN CHINA

國



PHP

111
C012
613

中
MODERNIZING THE
MIDDLE KINGDOM
THE PATH OF REFORM IN CHINA

中国近代化の政治経済学
MODERNIZING THE MIDDLE KINGDOM

改革と開放の
行方を眺む

岡部達味

YOSHIMITSU OKABE

RYANYS/04



PHP

199 9, 2, 4

RB

まえがき

「中国はどこへいくのだろうか？」というような疑問の言葉が、旧知の中国人研究者の口から何気なくもれるようになったのは、ごく最近のことである。改革を促進してきた人びとも今や数年前のように、「探索と模索の時代だから」、などとのんきなことはいえなくなってしまうたのである。それほど、今中国が直面している困難は大きいというべきであろう。表面的な数字をみるとわかりにくいこのような問題が、中国の全土を覆っている。

その結果は、あちらこちらに混乱現象を巻き起こしている。もちろん、悪いことばかりではない。前進と評価できることも沢山ある。しかし、困難に比べるといいことは少ないように思われる。それは中国を少し詳しく観察している人ならみてとることができるであろう。日本の新聞をみても、芳しくないニュースが増えている。そのような見聞を書いた書籍も少なくない。その意味では情報が氾濫しているという感じさえする。

本書は、そのような中国情報の氾濫の中にもう一つ情報供給源を付け加えようというふうなつもりで書かれたものではない。情報提供(what, when, how…)ではなく、なぜこのような状態が生じたか(why)という疑問に答えようとするものである。そのような納得のいく説明をすることに本書の存在価値を置きたいし、また、それだけに少し寿命の長いものを書きたいと思うたのである。

まえがき

本書で、そのような説明をするのに用いた手法の基礎は、だいたい次のようなものである。

第一は、筆者が大学で担当している国際政治の講義のために、限られた数ながら涉獵しやうりやくした内外の理論的文献である。幸いに筆者は、国際政治の現場に触れる機会を多少もつたことがある。したがって、これらの文献をうのみにせず、自分なりの枠組ができていると考えている。

第二は、地域研究に関する研究である。今日の多様な国際社会を理解するためには、なんらかの地域を研究することは不可欠であるが、これだけ難しい学問分野も少ない。言語・文化についての知識、歴史学、政治学、経済学等々、個人の能力に余ることばかりである。したがって、いちいちお名前はあげないが、多くの内外の同業者のお世話にどれだけなっているかわからない。

第三は、比較研究の観点である。比較研究なくしては社会科学も地域研究も成立しないであろう。たこつばに入ってしまったては、今日の社会が要求するような研究はできない。筆者の場合、中国と東南アジア（の一部）を専門分野として研究しているほか、日本についてもある程度のことがいえると考えている。これは、幾多いくたの国際会議で、日本の情勢や行動について説明させられているうちに、深みにはまったというべきか。また、中国研究者なら当然であるが、ソ連・東欧に対する関心も深い。ただし、お恥ずかしいことに知識の方はまことにころもとなき、研究などおこがましいことはできないという状態である。いずれにせよ、以上が筆者の比較研究の対象である。

第四は、中国人研究者自身の理論的説明である。一昔前は、中共党史とマルクス・レーニン

主義、毛沢東思想の通り一遍の知識があれば、これらのものをこなすことは難しくなかったし、また、たいして参考になる研究もなかった。指導者の発言を読んだ方がよほどおもしろかったものである。だから、かつては中国研究とたとえば欧米研究とは、決定的な違いがあった。欧米研究だと日本人研究者のあとを追うので手いっぱいということも多かったようだが、中国研究にはまずそういうことはなかったのである。しかし、思想開放的になった中国の研究者は、マルクス主義でも創造的なことをいい始めているし、西側の学問成果を吸収しようとして努力している。これからは、中国研究も欧米研究に近づくと覚悟しなければならないかも知れない。

さて、以上のような大量の基礎をもった手法など、はっきりいって一人の間には無理であろう。しかし、その無理をしなければならぬのが社会科学者だといって語弊があれば、地域研究と結び付いた国際政治研究者だということになる。これらの諸基盤を統合するものがあるとすれば、それはバランスのとれた良識というしかないであろう。筆者も年齢だけは、良識を語れるところに達した。しかし、いたずらに馬齢を重ねたのみで、日暮れて道遠しの感である。とにかく無理をしてやってきたので、その結果については不十分ではあっても読者の判断を仰ぐしかなからう。

こういう手法をなんと呼ぶべきかは筆者にもわからない。既成の表現で一番近そうなので、本書を『中国近代化の政治経済学』と名付けさせてもらった。出版部の御意向とは違ったが、わがままをいわせていただいた。

本書のもととの発想は、一九八一年にだした『中国は近代化できるか』（日本経済新聞社）の改訂版のつもりであった。しかし、前著は中国在住の経験をかかなり直接織り込んでいたので、その後在住の機会を得ず、短期の訪問だけだった筆者には、そのままの形でアップトゥーデートにするのは難しいということがわかった。そこで、次にそれ以後書き溜めた学術論文類を一般向けに書き直そうと考えたのである。ところが、中国情報の洪水と中国の激変をみていると、これも書き直す程度ではだめだという結論になった。結局ほとんど書き下ろしになってしまった次第である。

そんなことと、筆者の健康上の問題のために（外国出張で毛色の変った風邪のビールスにやられたらしい）、当初の予定より遅延したが、辛抱強く待つていただいたPHIP研究所第一出版部の真部栄一氏には、深く感謝している。また、最後になったが、真部氏との出会いを作つて下さった北海道大学の木村汎教授にも御礼申し上げる。

一九八九年二月

岡部達味

中国近代化の政治経済学
——改革と開放の行方を読む

●目次●

第一部 近代化への長い道

第一章 近代化の意義と背景 12

なんのための近代化か 12

中国の経験 18

中華人民共和国の成立 21

第二章 二つの「旧体制」が改革の対象 24

伝統的社會經濟体制 24

いくつかの研究 29

集権的經濟体制 34

第三章 近代化と改革への前史 41

中国共産党の近代化構想 41

中華人民共和国の成立以後 45

急進路線の挫折 50

改革と開放へのスタート 59

改革政策の曲折 63
経済改革の促進と政治改革の停滞 68

第二部 改革と開放をめぐる矛盾と対立

第四章 経済体制改革の矛盾と困難 74

十二期三中全会

改革の直面した問題 74

企業管理改革——請負制とリース制 82

価格改革——二重価格制の廃止 87

所有制改革——産権関係明確化 96

農業改革の行き詰まり 103

第五章 沿海地区発展戦略 112

「国際大循環」戦略 112

趙紫陽「意見」 115

「戦略」への批判 118

第六章 社会主義と資本主義 123

社会主義初級段階の意味

123

社会主義と資本主義

129

第三部 政治体制改革の曲折

第七章 政治体制改革とその意義 136

民主化のスタート 136

上からの民主化 139

経済体制改革と政治体制改革 147

八六年の政治体制改革論議 151

第八章 八七年の改革と十三中全会 159

政治体制改革の復活 159

八七年改革の具体的内容 163

第九章 八八年三中全会まで 170

經濟困難と治安悪化
十三期三中全会 176
170

第四部 中国をめぐる国際環境

第十章 国際情勢観の変化 186

是々非々主義の登場 186

転換の背景 192

第十一章 超大国との関係 197

中ソ関係の改善 197

中ソ関係改善の背景としてのイデオロギー対立 200

安全保障と経済上の要因 202

中ソ改善の限界 206

米中友好関係の持続と台湾 210

チベット問題 212

第十二章 近隣諸国と中国 215

周辺小国の懸念——ASEANを中心に 215

二つの朝鮮か 221

台湾分離傾向をおそれる中国 222

第十三章 対日関係 227

是々非々主義外交のなかの日中関係 227

終章 アジア太平洋と中国 234

開放中国の今後 234

政治・軍事的な将来 236

人名索引・事項索引

第一部

近代化への長い道

第一章 近代化の意義と背景

なんのための近代化か

中国が「近代化」への歩みを新たに加速し始めてから本書の刊行までに、約十年が経過している。この間、中国の発展はそれまでの停滞を吹き払うようなめざましいものがあつた。しかし、同時に多くの問題が噴出してきていることも、日々の報道からだけでも十分推察できる。単純ないい方をすれば、近代化にはプラス・マイナス両面があるということにならう。

そのような、マイナス面をかかえた近代化を中国はなぜ懸命に追求しているのであろうか？ 日本でも、十数年前の、中国の貧しくはあつたが、真摯な姿に郷愁を抱いている人は沢山いるだろう。基本的に近代化を支持している筆者でも、二十年以上前に初めて訪中したときの中国に、懐かしさを覚えるときがある。

それにもかかわらず、中国のみならず、ほとんど全ての発展途上国で、近代化への努力が行われているのはどういふわけであるうか。これには、いくつかの正当化の論理がみられる。た

たとえば、貧困の克服、劣悪な生活環境の改善、人間らしい生活等々である。確かにこれらも近代化の過程で目的とされている。それ自身、人権上不可欠な目標だといつてもいいだろう。

しかし、たとえば、近代化の一つの帰結が、日本社会だとして、土地の高騰で、マイホームは夢になり、毎日片道二時間もかけて満員電車で通勤して、オフィスでは、なれないOA機器に追われるという生活、また子供も思いきり遊ぶことなどは考えられず、将来のまともな生活をめざそうと思つたら毎日のように塾がよいをしなければならぬなどという生活、これらはそれほど豊かとも、人間らしい生活だとも思われぬことも事実である。

中国は、いま自ら進んでそのような生活の待っている社会を築こうとしているように見える。ひとところにくらべれば、中国社会は、日本やアメリカなどの社会にそれほど近づいてきている。まだ、貧しいが、そして相違点も大きいが、犯罪だの、流行、金がものをいう社会、公害（これは日米よりひどいなどという点では類似するところが増えている。したがって、「反近代」的思想のもちぬしからいえば、わざわざ住みにくい社会を建設するのに多大の努力を費やしているということになりそうである。

そこで、「なぜ近代化か」という問いに答えるには、これまでに述べたことでは不十分だといふことができる。現代の日本にいては、これ以上の議論はなかなかでてこないであろう。しかし、中国人にはこれに答えることは、おそらくそれほど難しくないのであろう。八七年から、八八年にかけて中国の新聞・雑誌に、近代化を達成して「世界民族の林」で自立することをめざす、というような表現が、頻出したことがある。これこそが、近代化を追求する最大の目的で

あるというのである。筆者にいわせれば、これは問題点を正確に把握した表現だといふべきであらう。もちろん貧困からの脱出や医療水準の向上なども重要である。しかし、それらも「世界民族の林」に伍^ぶしていくために必要なのだといういいかたもできるであらう。中心はあくまで、「自立のための近代化」という点にあるのである。

「球籍」^{グロブナショナル}の確保というような言い方もある。世界の正当なメンバーとしての地位を確保するという意味であらう。アメリカの一学者が、世界の百二十四カ国を対象に社会的、経済的指標に基づいて世界の国々に格付けをした試みが中国の新聞に発表されている（『世界経済導報』^{セカイケイジドウポウ}八年三月二十一日）。

これによると一位はデンマークで二百七点（得点基準は明らかでないが）、日本が百七十四点で十五位、ソ連が九十六点で五十八位であるのに対し、中国は七十四点で七十七位であった。まわりには、モンゴル、朝鮮、ビルマ、インドなどが並んでいる。このような状態は多くの人の危機感をいやがうえにも強めている。この格付けで上位にランクされなければ、なんの近代化かということになるのである。

ついでにいえば、一九八六年のGNPは日本が約一兆九千六百二十七億ドル、一人当たりが一萬六千ドルであるのに対して、中国は、GNPが約三千百九十億ドル、一人当たりになると三百十ドルである（IMF統計）。もちろん、ここには、円高や、物価の違い、産業構造の違いがあり、この数字がそのまま両国の経済力を反映するものではないが、国土にして日本の約三十倍人口で十倍の、かつ長期の優^よれた文明の歴史を有する大国の数字としては、心許^{こころもと}ないことは明

らかであるう。

国際社会の性格をみれば、この点はさらに明らかになる。世界は国家に分かれている。その国家を形成するのは、国民または民族(nation)である。あるいは、国民、または民族を形成したいと考えている人びとである。雑多なエスニック・グループが併存し、うまく国民が形成されなかったことよって、新たな国家が分離独立したという例もある。また、エスニック・グループ間に血で血を洗う激しい対立が続いている国家もある。

しかし、望むと望まざるとにかかわらずなく、世界が、国民国家(国民によつて構成されている国家という意味である。英語では nation-state という)および国民国家候補者にわかれていることは、否定できない。国家がそのような地位を占めるべきでないという考え方もあるし、国家以外の単位(国際機関とか多国籍企業など)の役割の増大により、国家の役割が低下しつつあるという議論もある。

しかし、いずれの見方をとるとしても、現実に国家が国際社会の最も主要な行為主体であり、主要な単位である、という事実は明らかである。人間の帰属感、アイデンティティのなかでも国家、あるいは民族が占める比重は、地域によつて、歴史によつて違いはあるものの、一般に依然として大きいものがある。

そのような国民国家から成っている国際社会を国民国家体系(nation-state system)というが、この国民国家体系内においては、主権平等、内政不干涉等、国民国家体系の原型ともいへべき十九世紀の国際社会において成立したルールがいまだに少なくとも建前としては残っている